

英語が「話せる」を 当たり前前の感覚へ

今の子どもたちが社会人になる頃には、今以上にグローバル化が進むことが予想されます。子どもたちの明るい未来のために、市の教育が大きく変わろうとしています。今後の取り組みについて市教育委員会の高橋富男教育長に話を聞きました。



市教育委員会
高橋 富男教育長(67)

市内においても 英語を使う時代へ

今まで、英語教育は「読む、書く」といった読解力の育成が中心でしたが、これからは「聞く、話す」といった子どもたち一人一人のコミュニケーション力を伸ばしていくことが求められます。

日本は、外国人観光客や海外留学生の増加など、国際化が進んでいます。市内の農家や工場にも海外から注文が入ったり、外国人技能実習生を受け入れる企業があったりします。今までは、海外に行かないと使う機会がなかった英語が、日本においても当たり前前

に使うようになってきます。これからの時代は、英語を話せることがすごいことではなく、当たり前という感覚になってきます。市では、そういった国際化が進む時代に対応できる人材を育成したいと考えています。

より多くの文化に触れ 新しい刺激を

2学期からALTを増やすことによって、子どもたちが外国人から学ぶ機会が増えますが、これは学力の向上のみを目的としていません。まずは、簡単な英語で聞く、話すといったコミュニケーション

ションを取ることで、学ぶことを楽しいと感じてもらえることが第一です。将来的に、中学英語は、小学校で学んだことを生かしながら、全て英語で指導し、子どもたちもそれに受け答えできるような授業を目指しています。

市で採用しているALTは、日本語が話せることを重要視しています。これは、子どもたちがコミュニケーションを取りやすいことを優先しているためです。

登米市独自で取り組んでいる「インターナショナルデー」。普段とは違う、さまざまな国から来ているALTと触れ合うことで、外国に対する視野を広げ、外国の生活や文化を学ぶ。



また、今までは同じ学校に長く在籍することが多かったALTを、ほかの教員と同じように、3年程度の期間で異動させるようにします。出身国の違うALTが、定期的に異動することで、子どもたちが複数の文化に触れることができ、ALT自身にも新しい刺激になればと期待しています。

意欲的に 取り組める科目に

これからは単語や文法だけを覚える暗記科目ではなく、学んだ表現を用いて自分の考えを話すなど、さまざまな角度から英語を学習していくこととなります。英語に慣れ親しむ面白さや、英語が使えるようになる喜びを実感し、子どもたちがもっと知りたい、もっと学びたいと思える授業になるよう取り組んでいきたいと考えています。